

氏名（本籍）	神村 幸蔵		
学位の種類	博士（言語学）		
学位記番号	博 甲 第 9748 号		
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Inferring and Learning EFL Vocabulary Using Morphological and Contextual Clues: Prefix Availability, Contextual Informativeness, and Learner Proficiency (形態素と文脈の手がかりを用いた英単語の意味推測と学習：接頭辞の利用可能性，文脈の有益性，学習者の熟達度に焦点を当てて)		
主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	卯城 祐司
副査	筑波大学 教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授		久保田 章
副査	関西学院大学大学院 言語コミュニケーション文化研究科 教授		博士（応用言語学） 門田 修平

論文の要旨

本研究は、外国語としての英語 (English as a foreign language; EFL) の学習者を対象に、未知語の意味推論における形態素情報と周囲の文脈情報、学習者の第二言語 (second language; L2) 熟達度の役割および推論された意味の学習について検証することを目的とした実証研究である。

第1章では、読解を通じた語彙学習とそれに不可欠な未知語の意味推論の重要性、そして本研究に取り組むに至った背景を説明している。

第2章では、L2の未知語推論における語中の形態素 (接辞、語幹) 利用の効果について議論が分かれ、文脈情報の有益性や学習者の熟達度および推論後の意味の保持を考慮した検証が必要であると主張している。L2読解に成功するために、単語帳を使うなどの意図的な学習法のみならず、読解や会話を通して付随的に語彙知識を得る必要がある (Nation, 2013)。Perfetti and Hart (2002) の語彙品質仮説 (lexical-quality hypothesis; LQH) では、テキスト理解を通して大量のインプットを処理することにより語彙知識が増加すると仮定している。このような読解を通じた語彙学習の理論的説明から、文脈から効果的に単語の意味を推論することができる。付随的な語彙学習により、未知語の意味推論は重要な役割を果たす。未知語推論の際、利用可能な言語的な手がかりや文脈、背景知識といった手がかりと組み合わせ、単語の意味を推論する (Haastруп, 1991)。しかし、これらのテキスト内の手がかり (i.e., 形態素、文脈情報) は常に推論に役立つわけではないため (e.g., Beck et al., 2003; Nakagawa, 2006)、推論中の手がかりを組み合わせさせた使用については検証する必要がある。さらに、Craig and Lockhart (1972) の処理水準の深さ仮説 (depth of processing hypothesis) を基に、学習者が単語処理に従事する度合いがその後の記憶保持に影響を与えると主張する研究もある (e.g., Hulstijn & Laufer, 2003; Knight, 1994)。この考えは、簡単に推論された語は簡単には保持されない (Haastруп, 1991) ことを示唆する。

第3章は、先行研究の見解や限界点を踏まえ、日本のEFL学習者の大学生を対象に2つの実証研究を行い、未知語の形態素情報と周囲の文脈情報、学習者のL2熟達度が未知語の意味推論の成功に与える影響 (研究1) および推論された意味の学習への影響 (研究2) を検証することを本研究の目的として設定したことが説明されている。

第4章は研究1について詳述している。この研究では、3つの実験を通して、EFL大学生を対象に、語中の形態素(特に接頭辞)の情報、周囲の文脈情報、および学習者のL2熟達度(特に語彙サイズと読解熟達度)が未知語推論の成果に与える影響を検証した。これらの実験でEFLの大学生が取り組んだ未知語推論タスクでは、学習者にとって既知/未知の接頭辞(接頭辞の利用可能性:利用可能 vs. 不可能)をもつ目標語が、推論するために比較的有益である/ない情報(文脈の有益性:より多い vs. より少ない)をもつ文脈文に提示された。結果から、接頭辞の利用可能性と語彙サイズは未知語推論タスクの成績へ影響を与えるが、互いに影響を与えることはないということが示された。実験2では、思考発話法によって推論タスク中に用いられた手がかりやストラテジーを観察した。接頭辞が利用できない条件では、目標語やその周囲の表現を言い換えるという3つのストラテジーの使用頻度が上がり、大学生レベルのEFL学習者は未知語中の接頭辞の利用可能性に敏感であった。また、実験3では、多肢選択式の推論タスクを用いて受験者が推論時に困難を抱えるプロセスが観察できるかを検証した。語彙サイズテストの成績が高い協力者ほどMorCon選択肢(形態素の意味を含み文脈にも合致する選択肢)を選び、逆にMor選択肢(目標語に含まれる接頭辞の意味を反映した選択肢)を選ばないことが明らかとなった。このことから、語彙サイズの大きな協力者は接頭辞情報のみならず文脈情報と照らし合わせて選択肢を選ぶのに対し、語彙サイズの小さい学習者は文脈情報を利用することが難しく語形の情報にのみ依存するため正確な推論ができないと考えられる。

続く第5章で記述される研究2では、研究1で検証したテキスト内の手がかりを用いた推論の成果がその後の記憶の保持に見られるか否かの検証を目的に2つの実験が実施された。実験では、EFL学習者が推論タスクに取り組んだ1週間後に再生テストに解答した。実験4では目標語のつづりが、実験5では目標語がカッコに置き換えられた推論タスクの文脈がそれぞれ再生の手がかりとして提示された。実験4の結果から、推論された語の記憶保持において、推論時の形態素と文脈の手がかりは相互に作用するが、これは学習者の語彙サイズによって使える手がかりが異なるためであると考えられる。具体的には、文脈を用いた未知語推論は負荷が高いため、学習者は推論した単語の意味を保持しやすいことや、文脈情報を推論に利用するためには、ある程度の語彙サイズの大きさが必要であることが示唆された。一方、実験5の結果は、実験4の結果を一部支持するに留まった。EFL学習者は、文脈の有益性に関係なく、未知語の接頭辞が既知であればそれを用いて推論に成功することや、語彙サイズの大きい学習者は文脈情報を利用した推論が可能であるが、そうでない学習者は語形情報のみに頼りがちになる。語彙サイズの大きい学習者の推論の成績は全体的に高く、それは保持の語彙サイズ群間の差にも現れることなどが示された。

第6章では、5つの実験を通し、日本のEFL学習者の未知語推論とその後の記憶保持に対する形態素と文脈情報の役割および習熟度との関わりについて総合的に考察を行い、形態素情報は、比較的熟達度が低い学習者にも利用可能な手がかりであるが、語彙サイズの伸長に伴ってその効率は良くなる可能性が示唆された。また、本研究では文脈情報はそれ単体で意味推論に貢献することは観察できなかったが、その他の手がかりや学習者の熟達度、使用ストラテジーといった要因によって、未知語推論の成功およびそれに続く学習に寄与することが示された。加え、推論時に文脈の情報を用いることにより、学習負荷が高まり、推論された語の意味が保持されやすくなる可能性が示唆された。ただし、文脈情報をうまく活用し推論に成功するためには、ある程度語彙サイズが必要となることにも注意すべきであるとしている。

第7章では、最後に、5つの実験を通して得られた知見、限界点や今後の研究に期待されること、そして本研究の知見から考えられるL2の研究者と教育者への示唆がまとめられている。

審査の要旨

1 批評

本研究の目的は、大学生の英語学習者による接頭辞と文脈情報、および語の意味推論による語彙習得に学習者の英語習熟度がいかに関連しているかを明らかにすることである。5つの実証研究を通して、(1) 大学生レベルの英

語学習者は、未知語内の拘束形態素レベルの情報に対しても敏感であり、未知語の意味推論の際、未知語の構成要素を知っていれば、接辞のような拘束形態素のレベルそれらの意味を組み合わせることで推論することができること、(2) 接頭辞に関する知識が利用できることが、文脈情報が有益であることよりも、未知語の意味推論に役立つこと、(3) 形態素情報は、比較的熟達度が低い学習者にも利用可能な手がかりであるが、語彙サイズの伸長に伴ってその効率は良くなること、(4) 語中の形態素情報が利用できない場合、大学生レベルの英語学習者は語句 (phrase) の繰り返しや、既に知っている知識 (prior knowledge) を使って推論しようとする、(5) 本研究の結果から文脈情報がそれ単体で意味推論に貢献することは観察できなかったものの、その他の手がかりや学習者の熟達度、使用ストラテジーといった要因によって、未知語推論の成功およびそれに続く学習に寄与すること、(6) 学習者は接頭辞と文脈の両面から語彙推論を行うが、紙ベースの多肢選択 (paper-based multiple-choice) 形式でもこのようなストラテジーの観察は可能であること、(7) 第二言語の語彙サイズテスト (vocabulary size test) の結果により、どの程度語彙推論がうまくできるかを予測することが可能であること、(8) 低い習熟度の学習者は、文脈よりも単語の形態素情報に頼る傾向があることなど有益な結論を得た。

一方、次のような課題もある。(1) 実験3において、多肢選択式の推論課題を用いて学習者が推論中に困難を抱えるプロセスの特定を試みているが、論文全体における位置付けについて記述が少ないという印象を受けること。(2) 実験パッセージについて「英文のレベルが学習者に易しすぎた」と考察しているが、この可能性は予備調査を通して実験前に排除できなかったのかが不明確であること。(3) 意味推論に使用した単語が低頻度ではあるが、単語としては知らずとも、語幹が既知であれば、容易にその意味が類推できるものが多く含まれていること。(4) 上記 (3) を考慮すると、実験3から5のように接頭語を活用できるかどうか (prefix availability) と文脈情報の有益性 (context informativeness) とを単純に比較し語の意味推論やその後の学習の議論を行うことについて、妥当性が十分には確保されているとは言えないこと。(5) 従って、接頭辞を活用できるかどうか及び文脈情報が有益かどうかを、比較可能な共通の測定手法で評価したり、単語を知っているかどうかと共に語幹を知っているかどうかの確認を事前に行うなどの過程を実験の手続きに組み込み、それによって学習者による接頭辞と文脈の使用を通じた未知語推論及び付随的学習の様相を、包括的に検証することが今後望まれる。

これらの課題はあるものの、日本人英語学習者による英文読解における低頻度語の推測や推測にもとづく語彙習得について、このような詳細な実験を計画し、データ収集を行ったことは、きわめて意義のあるものであると言える。本研究は、一貫した枠組みの中で詳細な実験計画及びデータ収集を行ない、先行研究との比較から丁寧に結果を考察していること、そして、得られた知見は第二言語語彙学習、および語彙処理に関する知識向上に大きく貢献すると同時に教育的な示唆にも富むことから、極めて意義のあるものと評価できる。

2 最終試験

令和3年1月19日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士 (言語学) の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。